

「コシヒカリ」 種子を扱う上での留意点

令和6年3月13日
産米改良協会

採種は産種子は、いずれのロットも発芽率90%以上の合格基準を満たしています。
しかしながら、令和5年産「コシヒカリ」種子において、出芽不良の事例があるようです。
適切な浸種が、均一な出芽に繋がりますので、以下に留意して育苗を行ってください。

1 品種特性から

本県の奨励品種のうち、「コシヒカリ」は種子休眠が深い品種です。したがって、3月、4月の比較的早い育苗の場合は、十分に浸種期間をもち、播種前に温度を高めた催芽を行う等することにより斉一な発芽に努める必要があります。

2 浸種時の水温を10℃以上に確保することが必要です

浸種時の水温が10℃を下回る場合、浸種開始時に種子がストレスを受け、発芽率が低下することが、他県の報告と本県での追認試験により確認されています。

このため、浸種の開始に当たっては、適切な水温管理をされることをお勧めします。

3 浸種期間は水温に留意して十分とりましょう

停滞水(水槽など)の中で、種籾容量の2~3倍量の水に積算水温 100℃程度浸種します。

この時、水温を10℃以上に保ち、酸欠による発芽不良を防ぐために、2~3日に1回は水の交換を行います。水の交換ができない場合は、エアポンプの活用も有効です。

コシヒカリは、穂発芽性が難のため休眠が深く、浸種期間を長めにとらないと、発芽ムラの恐れがあります。

4 催芽は浸種後の種子の状態を見ながら鳩胸状態にする

播種前に、催芽すると斉一に発芽する。この作業は、播種1から2日前に催芽機や風呂等を用いて実施する。このとき、浸種の状況によって発芽程度が異なるため、鳩胸状態となるかどうか確認しながらきめ細かく観察する。

5 イネ苗立枯病防除

別紙参照

6 その他

- ・浸種は種子を低酸素の状態に遭遇させることでもあるので、長期間に渡ると発芽力の低下を招く。とりわけ、温湯消毒種子や穂発芽性が”易”である「キヌヒカリ」や「ヒメノモチ」では、この傾向が強い。よって、浸種期間を必要以上に長くとらないことと、浸種液の溶存酸素濃度を低下させないような対応が必要である。
- ・播種前に、催芽すると斉一に発芽する。この作業は、播種1から2日前に催芽器や風呂等を用いて実施する。このとき、浸種の状況によって発芽程度が異なるため、鳩胸状態となるかどうか確認しながらきめ細かく観察する。
- ・病原細菌は河川、ため池の水等にも生息しているのでこれらを浸種・催芽に使用することは避け、水道水等のきれいな水を使用する。